

ダイヤモンドを獲れ

あらずじ

二〇〇一年。川崎ストレイドッグスのスカウト根津庸一と大塚勝秀は、球団社長の万代から有望選手である北杜大学の河本投手の獲得を命じられる。だが、球団の改革を進める万代にベテランの大塚が反発して退団してしまう。

根津は、河本を見に行った球場で控え投手である戸上を目撃、その才能にほれ込む。

試合で実力を発揮できない戸上にアドバイスを送る根津。根津は才能あふれる投手だったが、プロ初登板の試合でケガを負い引退した過去があった。才能を開花させ一躍ドラフトの注目選手となる戸上。

過去の因縁が原因で北杜大学から出禁となっていた根津は興信所所員・西林の仲介で、監督に金を渡し懐柔。出禁を解く。

大塚はライバル球団ボイジャーズのスカウトに復帰。根津の強力なライバルとなる。

注目の的となった戸上は、周囲の急激な変化に戸惑い金だけを信じるようになっていく。根津は、戸上の心を掴むため、離婚して以来会っていなかった父親と再会させる。だが、戸上の契約金をせびる父を見て戸上はますます人間不信になっていく。

さらに、河本に絡まれた戸上は、もみ合いの中、再起不能のケガを河本に負わせてしまう。

「自分を獲りたいならボイジャーズよりも高い金を積め」

戸上のそう宣言された根津は、球団社長の万代が不正なりべートをもらっている情報を掴み、それをネタに戸上の獲得資金を出させることに成功。契約寸前までこぎつける。球団にも戸上獲得はほぼ決定だと咆哮して眠りにつく根津。

だが、翌日のテレビで見たものは、ボイジャーズを逆指名した戸上の姿だった。

戸上の母・恭子がやっていた株が大暴落、その損失金を肩代わりすることを条件に戸上はボイジャーズへの入団をやむを得ず決めたのだった。

戸上に会いに行く根津。戸上の肘を壊せば自分と同じように野球ができなくなる。だが、根津には戸上をケガさせることはできない。襲撃に来た河本から、根津は自ら犠牲になり、戸上を救うのだった。

人物

根津庸一 (30) (52) ……川崎ストレイドッグスのスカウト
戸上俊太郎 (22) (42) ……北杜大学野球部の控え投手
大塚勝英 (65) ……川崎ストレイドッグスのベテランスカウト
万代克己 (50) ……川崎ストレイドッグス球団社長
河本僚太 (22) ……北杜大学野球部投手
西林俊朗 (40) ……ワールドカワサキ興信所社員
戸上恭子 (53) ……戸上の母
三田幸彦 (48) ……北杜大学野球部監督
飯岡明 (30) ……川崎ストレイドッグスのスカウト
田島和夫 (55) ……戸上の父
遠藤 (48) ……川崎ストレイドッグスのスカウト部長
前田 (42) ……川崎ストレイドッグスのスカウト
添木 (50) ……川崎ストレイドッグスのスカウト
三好 (37) ……川崎ストレイドッグスのスカウト
西村 (40) ……川崎ストレイドッグスのスカウト

○喫茶店・中（現在）

女の指に大きなダイヤモンドの指輪が光っている。

テールに書類を並べる根津庸一（52）。

根津「すごいですね。そのダイヤ」

女「これ？全然。五百万ぐらい？」

根津「五百万！私にはとても」

根津、鉛筆で書類に印をつけている。

女「その鉛筆」

根津「はい？」

女「その鉛筆の芯もこのダイヤも、どっちも炭素で出きてるんだって」

根津「そうなんですか」

女「同じ炭素でも、鉛筆の芯になる物もあるればダイヤになる物もある」

根津「なるほど」

女「二つを分けるものって何だと思う？」

根津「いや、無知なもので」

女「地下二百メートルで高熱と高圧にさらされた炭素が固く結びついてダイヤになる」

根津「はあ」

女「要は極度の熱とプレッシャー。それがダイヤをつくる」

根津の握った鉛筆の芯がバキッと折れる。

根津「あの、この印の所に印鑑を」

女「ここに押せばいい？」

女、書類に印鑑を押す。

根津「あとここにも。ありがとうございます」
女、傍らにあった新聞に目を落とす。

女「引退だって」

根津、聞いてない様子。

女「知ってるでしょ、戸上」

と、スポーツ新聞の記事を見せる。

根津「いや、私はそういうのはさっぱり」

女「野球見ないの？営業の人はこういうの
見ない」と

根津「すみません」

女「サッカー派？嫌いなんだよな、私」

根津「いやいや、スポーツがまったくダメで
して」

女 「そんな大きな体して？」

根津 「恥ずかしいながら」

女 「もったいない。やっけてたらいいとこ

までいったんじゃない？」

根津 「いや運動は全然。お腹もほら」

根津、自分の腹の肉をつまむ。

女 「ダメよ、身体動かさないと。ゴルフは

どう？ハマっちゃうから」

『戸上、引退かけて今日登板』と書かれ

た新聞の見出しを見つめる根津。

女の指のダイヤモンドがまばゆい光を放

っている。

タイトル『ダイヤモンドを獲れ』

遠くから応援団が鳴らす太鼓の音が聞こえてくる――。

○ 双眼鏡（二〇〇〇年二月）

T 『二〇〇〇年二月』

越しに映る高校生投手。

応援団の太鼓の音と声援が球場にこだま

している。マウンド上の投手、手にした

ロジンバッグを尻のポケットに入れると

伸びのある速球を投げこむ。

○ 野球場 A・バックネット裏

スピードガンをかまえてマウンド上の投

手を双眼鏡で見ている根津庸一（30）。

根津 「百三十。評判ほどではないですね」

大塚勝英（65）が隣の座席に座布団を

敷いて座っている。双眼鏡を手にしてい

るが見ているのはマウンドではなく一塁

側のスタンド。

○ 大塚の双眼鏡

越しに映る四十過ぎの女性。その尻をロ

ックオンしている大塚の双眼鏡。

大塚の声 「ちよっと小ぶりやな。もうちよっ

とデカいほうがええんやが」

○野球場A・バックネット裏

根津、大塚を呆れた表情で見ながら

根津「どこ見てんすか。尻ばかり追って」

大塚「アホ。そんなスケベやないわ」

根津「いや、見てたでしょう」

大塚「あれはあのピッチャーの母親や」

根津「え？」

双眼鏡で一塁側スタンドの女性を見る根津。

○根津の双眼鏡

越しに映る先ほどの女性の尻。

根津の声「人妻が趣味ですか」

大塚の声「アホ。高校生を見るときはな、母

親のケツを見るんや」

根津の声「ケツ？」

大塚の声「母親のケツがデカければデカいほ

ど息子の体も大きく育つ。スカウトの常識や」

○野球場A・バックネット裏

根津「本当ですか、それ」

大塚「ホンマに決まっとるやろ。江川も野茂

もお母ちゃんのケツはプリプリやったで」

根津、苦笑いで聞いている。

大塚「今回は外れやな。次や次」

大塚、手帳に書かれた選手の名前に鉛筆

で横棒を引くと席を立つ。

○野球場B・一塁側スタンド席

根津と大塚が内野の選手を見ている。

大塚「内野の守備は足を見るんや」

根津「ケツの次は足ですか」

大塚「母親のやない、選手の足や」

根津「わかってますよ」

大塚「センスがある子は足の動きに無駄がない。理に適っとるから美しいもんや」

バッターが打ったゴロを遊撃手が捕球してセカンドへ投げる。ボールが大きく逸れて後方へ転がっていく。

○同・一塁側スタンド席

根津「バタバタですね」

大塚、手帳に書かれた選手の名前に横棒を引く。

大塚「次いくぞ」

根津「もう？」

大塚「これでも長く見た方や。スカウトの仕事は足や足」

と、席を立つ大塚。急いで荷物をまとめる根津。

○野球場C・バックネット裏

ストツプウォッチを片手にバッターを見つめる根津、その隣に大塚。

大塚「打ったで！」

瞬間、ストツプウォッチを押す根津。

ショートの上を越えて外野に転がる打球。

一塁ベースを駆け抜ける選手。

ストツプウォッチを止める根津。

根津「四秒台前半、まあ悪くないですね」

大塚「お前、今の選手、どう思う？」

根津「どう思うって……」

大塚「ええからはっきり言うてみい」

根津「あまりいい選手だとは思いません」

大塚「なんでや？」

根津「……」

大塚「言うてみい」

根津「一塁ベースを駆け抜けたからです」

大塚、ニヤリと笑う。

根津「あの打球なら二塁も狙えたはずです。

あの選手は一塁ベースを駆け抜けて二塁を狙おうともしませんでした」

大塚「上出来や。まあまああの観察力しとる。

スカウトってのはな、数字じゃわからんところを見るかどうか勝負や」

苦笑いしてストツプウォッチの数字をリセットする根津。

○大学・野球部練習場

部員たちの練習を見ている大塚と根津。

大塚「ちよっとテストや。あの監督を見て気づいたことを言ってみい」

根津、監督を見る。

根津「年は五十代。体重は九十キロぐらい。運動部の監督としては太りすぎ、ってところですか」

大塚「なんや、それだけか？」

監督の腕に高そうな時計が光っている。

根津「腕時計……。ロレックスですかね」

大塚「新品なら五、六百はする。大学の監督でもらう給料にしてはちよっと高いな」

根津「はあ」

大塚「ここは去年、プロに行った選手がおつたな。逆指名でボイジャーズいった松原つて子や。契約金は八千万ぐらいやった」

根津「俺の契約金の方がちよっと上ですね」

大塚「いらんこと言わんでいい。八千万やったら監督に八百は入っとるはずや」

根津「はあ」

大塚「見てみい、これ」

大塚、目の前の防球ネットに大きく空いた穴を見せる。

大塚「監督やったらロレックス買う前にやることがある。ああいう輩は信用できん。金であつちこつち転ぶタイプや」

大塚、足元に落ちているボロボロの球を根津に投げる。

○走る車・中

ハンドルを握る根津。その肘に大きな手術痕が見える。隣でタバコをスパスパと吸いながらスポーツ新聞を読んでいる大塚。

大塚「どや、面白い仕事やろ」

根津「はあ」

大塚「なんや気のない返事やな。やっぱり嫌か？スカウトやるの」

根津「いえ、感謝してます」

大塚「ケガせんかったら今ごろ、とか思ってるのか」

根津「思っていないですよ」

大塚「だったらええ」

根津「……」

大塚「ええ選手ってのはな、光って見えるんや。たとえやないで。本当に光ってるんや」

根津「また」

大塚「なんや信じてないんか？まあええ。お前も見つけるはずや。ダイヤモンドみたいなヤツを」

根津「楽しみにしときますよ」

根津、大塚が座席に敷いた座布団を見て

根津「大塚さん、それ」

大塚「最近腰が痛くてかなわんのや。そろそろ引退やな」

根津「そんな」

大塚「本気にすなアホ。お前を一人前のスカウトにせんと死んでも死にきれん」

車が夕暮れの道路を走っていく。

○川崎ストレイドッグス事務所・廊下（二〇〇〇年四月）

T『二〇〇〇年四月』

根津、スポーツ新聞を読みながら歩いている。

記事には『川崎ストレイドッグス、新球団社長に万代克己氏が就任。親会社からの抜擢』との文字。

向かいから飯岡（30）が来る。

飯岡「おい、会議はじまるぞ」

根津「シヨンベンだよ」

飯岡「やっぱ元ドラフト一位は違うな、スカウトの仕事なんてシヨンベン以下か」

根津「朝から絡むな、ドラフト五位が」

飯岡「大塚さんに気に入られてるからって舐めた仕事すんなよ。スカウトじゃ俺が先輩だ」

根津「対した実績もないだろ」

飯岡「おまえが言うな」

去っていく飯岡。

○同・会議室

スカウト部長の遠藤（48）をはじめ関東担当の大塚と根津、東海担当の飯岡、九州担当の前田（42）、関西担当の添木（50）、北海道・東北担当の三好（37）、中四国担当の西村（40）らスカウトたちが座っている。

遠藤「他に逆指名枠の候補ありますか？前田さん、九州は？」

スカウトの前田、メモ帳を見ながら

前田「なんとといっても今年は星野重工の片山です。パンチはないですが率はかなり残せるかと。足も速いし守備だって悪くありません」

大塚、配られた資料を見ながら

大塚「百七十か。小粒やな」

前田「若松は百六十八でした」

大塚「いつの時代の話や。外野やろ？肩はあるんか？」

前田「レーザービーム、とはいきませんが悪くはないです。監督や両親にパイプも作ってますんで逆指名は確実に獲れるかと」

大塚「ウチの外野は手薄やからな。すぐにレギュラー張れるんとかやいますか？」

遠藤「皆さん異論なければ一枠目は片山でよいかと」

大塚「何もなければ確定やな。気抜かんと他球団の動きもチェックしとくんやで」

遠藤、後ろのホワイトボードに大きく『

逆指名 星野重工 片山』と書く。

遠藤「逆指名のもう一枠、推薦したい選手はいますか？」

三好「東北の有力選手はボイジャーズが困い込んでて手ができませんね」

添木「もう白旗か？まだ四月だぞ」

三好「白旗も何も、ボイジャーズが裏金ガンガン渡してると話ですから。貧乏球団のウチが勝てるわけないですよ」

飯岡「ウチは貧乏じゃなくてドケチなんですよ」

大塚「だいたい逆指名って制度が問題なんや。そら好きな球団選んでいいって言われたら選手は金くれるほう行くに決まっとる」

西村「制度が中途半端なんですよ。大学生と社会人は球団を指名してもOKで高校生はダメなんて」

飯岡「そうだったらウチに入るやつなんて誰もいませんよ」

遠藤「飯岡、言いすぎだぞ」

大塚「ウチもボイジャーズぐらい金出してくれたら仕事が楽になるんやが」

飯岡「新しい社長次第ってことか」

根津、船を漕いでいる。

遠藤「根津！」

ハツとして起きる根津。

遠藤「何か意見は？」

根津「あ、いや自分は特に……」

呆れた顔の遠藤。

○同・喫煙所

根津、飯岡、前田らがタバコを吸っている。

飯岡「やっぱ舐めてんだろ、おまえ」

根津「ちよつと寝てただけだ」

飯岡「それが舐めてんだ」

前田「二人とも落ちついて。明日の会議は新

社長が来るんだから根津くんも気をつけな

いと。目をつけられたらお先真っ暗だよ」

飯岡、タバコを消して

飯岡「根津、今度は逃げるなよ」

根津「なんだ？意味わかんねえこと言ってるな」

灰皿に捨てたタバコがジュッと音を立てて消える。

○根津のマンション・リビング（夜）

いかにも男の一人暮らしの家具の少ない殺風景な部屋。ソファに寝そべって缶ビールを飲みながらテレビを見ている根津。気づかないうちに左腕の手術跡をさする。

根津、少し酔っている。

根津「逃げた？誰が逃げたんだ」
缶ビールを飲む根津。

○同・会議室

新社長の万代克己（54）がテーブルの中央にいる。

万代「新しく川崎ストレイドッグスの社長に就任した万代です」

押し黙るスカウトたち。

万代「野球に関しては素人ですが、金勘定については三十年やってきた自負があります。知っての通り、来年はクラブハウスの建て替えも予定されています。使える予算は昨年より厳しくなると思っています。みなさん、ご協力よろしくお願いします。じゃ、遠藤君、続きを」

遠藤「えー、では逆指名のもう一枠ですが」
大塚「ピッチャーやったら北杜大学の河本が
ずば抜けてますな」

前田「秋季リーグでも凶抜けた成績だったら
いいですね」

大塚「スピードも制球力も去年からグンとアップしとる」

西村「ただボージャーズも狙ってるって話ですからね。中々難しいかと」

添木「じゃあ今年の逆指名は一枠だけ使って、
二位は高校生でいきますか？」

飯岡「ところがその高校生も有力選手はボー
ジャーズ以外は進学するって宣言してます
からね」

三好「またボージャーズか。やり方がアコギ
だよな」

万代、会話に入らない根津を見て
万代「君、名前は？」

スカウトたちの会話、一斉に止んで
根津「根津です。根津庸一です」

万代「君が根津君か」
万代、持参した書類を手に取り

万代「契約金一億円で入団、五年後に一勝も

できずに引退、それまでの年棒ふくめると
一億五千万円の不良債権」

静まり返る会議室。

大塚「社長、そういう言い方はどうかと」

根津「……いえ、そのとおりですから」

万代「これから仕事で返してくれるんだろ」

根津「そのつもりです」

万代、大塚に視線を向け

万代「さっきの河本っての獲りましょう。大

学で人気ナンバーワンと聞いてます」

大塚「それはええんですが、金かかりまっせ」

万代「それを何とかするのがスカウトの仕事
でしょう？」

大塚「そろそろやけど、限度ってもんがあり
ますからね」

万代、手元の書類を見て

万代「大塚さん、去年の交際費、規定をかな
りオーバーしてますよね。スカウトだから
って使い放題ってわけじゃない」

大塚「まるでその金で遊んでたような言い方
ですな」

万代「そうは言っていない。ただ、今までのよ
うに領収書が切れない金は使えないと思っ
てくれれば」

大塚「金は出せんが選手は獲れっちゅうこと
ですか。そら無理ってもんですわ」

万代「ただ金を積めばいいならあなたの仕事
はいらない。そうでしょう？」

大塚「……」

万代「大塚さん、やり方を見直してもらわな
いと。もう前のような時代じゃないんです
よ」

大塚、腕を組んで答えない。

万代「根津君をスカウトとして雇ったのも、
あなたが無理やりねじこんだって聞いてま
すよ」

飯岡「やっぱりドラフト一位は特別扱いか」

遠藤「飯岡」

万代「とにかく河本の獲得、よろしく願
いします」

○走る根津の車・中

運転する根津。助手席に大塚。

根津「ああいう言い方はないでしょう、ああいう言い方は」

大塚「そうカッカすな」

根津「なんなんですか、あの万代ってのは。

あきらかに俺たちを狙ってましたよ」

大塚「なんや本社の赤字をV字回復させたやり手だったらしいで」

根津「野球は素人って、だったら黙ってるって話ですよ」

大塚「今からイライラしてたら先が持たんぞ。大変なのはこれからや」

車、駐車場へ入って止まる。

根津「大変って、何がです」

大塚「まあついてこい」

車から出て歩き出す大塚。後を追う根津。

○北杜大学野球部練習場・入口

練習する野球部員たち。フェンスの外で

野球部長と押し問答している大塚と根津。

野球部長、大塚の名刺を見ながら

野球部長「ですから、ストレイドッグスの関係者は立ち入り禁止だと」

大塚、頭を掻きながら

大塚「こんな年寄りに、そんな意地悪せんでも」

野球部長「監督の三田から言われていることなので」

グラウンド内、バットを手に厳しい表情で部員を見ている監督の三田幸彦(48)。

三田の腕にはロレックスが光っている。

三田「(部員に向かって)おい、それで真剣にやってんのか!ふざけてんじゃねえぞ!」

野球部員「エイッス!」

大塚「とにかく監督と話だけでもできんやろか」

野球部長「……少し待ってもらえますか」

野球部長、大塚の名刺を手に三田の元へ

行く。三田、渡された名刺を破り捨てる
と大塚に向かつて歩いてくる。

三田「あんたの顔は見たくもない。出て行つてくれ」

大塚「そろそろ水に流してくれんやろか？」

三田「無理だね。今後もストレイドッグスの人間と話すつもりはない」

大塚「そこを何とか」

三田「無理だって言ってるだろ、いいから帰れ」

と、片手で追い払うジェスチャー。カッときて前に出ようとする大塚の肩をグツとつかみ、根津が前に出る。

根津「その言い方はないだろ？虫追い払うみたいに」

三田「誰だ、おまえ？」

根津「誰でもいいだろ。大体なんだ、監督のクセにロレックスなんてしやがって」

三田「俺が何の時計してようが勝手だろうが、帰れ！」

根津「頼まれても来るか！」

とグラウンドの土を足で三田にかける根津。

三田「なんだ、おい！」

足で土をかけ返す三田。

大塚「いや、えらいすんません。根津！いいから謝れ」

と根津の頭を無理やり下げさせる大塚。

○走る車・中

ハンドルを握る根津。助手席でスポーツ新聞を読む大塚。

大塚「おまえが怒るなや、話がこんがらがるやろ」

根津「すみません」

根津「何があったんです、あの監督と？」

大塚「おまえも知らんくらい前の話や。あの大学のショートを強引に指名したことがあったな」

根津「はあ」

大塚「その子は三田の強い推薦で社会人入りが決まっていたんや。悩んだあげく社会人を蹴ってウチに入団した。三田のメンツは丸つぶれや。もちろん謝罪には行ったがすごい剣幕で追い返されたわ」

根津「本人の意志はどうだったんです？」

大塚「そらプロに行きたがっていた。社会人入りはその子の親と三田が強引に決めた話や」

根津「だったら」

大塚「そんな簡単な話やない。金も絡む、大塚と社会人の長年のつながりもある。それをウチが横からかさらったワケや」

根津「それでも本人の希望なら」

大塚「その子な、三年でクビになった。俺の目がおかしかったとは思わん。それでもプロで成功するのは一握りや。プロか社会人か、どっちがあの子の人生にとって良かったんか俺にはわからん」

大塚、根津の左腕の手術跡を見る。その視線に気づきながら知らぬふりをして運転する根津。

○市民球場・外へ構内

入口へ走る根津。

根津「大塚さん、急いで！」

大塚「そんなあせらんでも大丈夫や」

あとから歩いてついて行く大塚。

根津「そんなこと言ったら試合終わっちゃいますよ」

入場口から薄暗い構内へ入る。

階段の向こう、まばゆい陽の光に包まれている。

階段を駆け上る根津。

観客たちの歓声、徐々に大きくなる。

○同・バックネット裏

階段の出口に立つ根津、マウンド上のピッチャーを見ている。

大塚、遅れてやってくる。

大塚「河本はまだ投げとるな」
根津「ええ」

大塚「今日の出来はどうやろな」
と座席に座布団を敷いて座る大塚。
バッグからスピードガンとビデオカメラ
を取り出す根津。

○同・グラウンド内

マウンド上の河本僚太（22）が速球を
投げこむ。

大きく空振りするバッター。

捕球音が球場に響く。

○同・バックネット裏

ビデオカメラを構えた根津、その隣でス
ピードガンを構えている大塚。

大塚「百四十キロ、今日のマックスやな」
根津「……」

大塚「どしたんや？ 渋い顔して」

根津「ちよつと肘を気にして投げてるような」

大塚「痛めとるかもしれないってことか」

根津「なんとなく、ですが」

大塚「それ、ハッキリするまで誰にも言った
らあかんで」

離れた席から身を乗り出すボイジャーズ
のスカウト。

スカウト「やっぱりドッグスさんも河本です
か？」

大塚「社長の命令で来とるだけや。まだわか
らん」

スカウト「またまた」

大塚「そっちはどうなんや？」

スカウトA「うちは去年ピッチャー獲ってま
すから」

大塚「だったらなんで見に来とるんや」

スカウト「それは、その」

大塚「まあ河本は誰でも狙うわな。他に注目
しとる選手はおらんのか？ 教えてくれや」

スカウトA「いやいや、勘弁してください」

大塚「こっちも教えたるから、な。（根津に）

ちよつと缶コーヒー買ってきてんか？二本
や」

と小銭を渡す大塚。

○同・構内

ビデオカメラを手に薄暗い構内をぶらつく根津。
遠くからズドンッという捕球音が聞こえる。根津、近づいていく。
鉄製の扉に『室内ブルペン』と書かれたプレートが貼ってある。扉の隙間から中をのぞく根津。

○同・ブルペン・中

一人の投手が投球練習をしている。戸上俊太郎（22）である。振りかぶって速球を投げる戸上。
重い球が近藤豊（22）のキャッチャーミットに刺さる。

近藤「ナイピーツ！いい球きてるよ」
戸上がもう一球投げ込む。ズドンッという捕球音が響く。戸上に見とれている根津。

根津「……見つけた」

○同・バックネット裏

大塚の元へ走る根津。だが大塚の姿が見えない。

スカウトA「ずいぶんかかったね」

座席に敷かれたままの大塚の座布団がある。

根津「大塚さんは？」

スカウトA「帰ったよ」

根津「帰ったって」

スカウトA「なんか会社に呼び出されたとか言ってたけど」

根津「そう……ですか」

スカウトA「まだ見るの？」

根津「いや、ちよつと報告書のまとめを」

スカウトA「本当は他に注目してる選手がい

るんじゃないの？」

根津「そんなことないですよ」

スカウトA「まあそうか、大変だね、新人は」
去っていくスカウト。

アナウンスの声「七回の表、北杜大学ピッチ
ヤー交代をお知らせします。河本君に変わ
りまして戸上君、戸上君」

河本がベンチに走り、戸上がマウンドに
上がる。

根津「戸上、か」

と手帳にメモしてビデオカメラを構える。
ブルペンとはうって変わって自信なさげ
な表情の戸上。ブルペンで見た投球とは
明らかに違う棒球を簡単に打ち返される。
ビデオカメラを下げる根津。

○川崎ストレイドッグス事務所・スカウト部

入ってくる根津。閑散としている室内。

見回すが大塚の姿はない。遠藤、根津を
見てすぐに目をそらす。

根津「大塚さんは？」

遠藤「いや、ちよっとな」

露骨に動揺している遠藤。

○同・廊下

不安げな顔で歩く根津。向かいから飯岡
が来る。

根津「おい、大塚さん見たか？」

飯岡「おまえ聞いてないのか？」

根津「なにを？」

飯岡「マジか」

根津「なんだ？言えよ」

飯岡「大塚さん、会社辞めるって言って出て
行ったよ」

根津「辞める？なんで？」

飯岡「社長とモメたらしい。詳しくは俺もわ
からん」

根津「いまどこに？」

○走る車・中

運転する根津。助手席のシートに大塚の座布団がある。

○二軍球場・駐車場（夕）

荒々しく停まる根津の車。
根津、座布団を手に足早に球場へ入って行く。

○同・内野スタンド（夕）

座席に座った大塚がグラウンドで練習している選手を見ている。根津、近づいて座布団を大塚に放り投げる。

大塚「そんな怖い顔すな。まあ座れ」

と、座布団を拾って座りなおす大塚。

根津「辞めないでください」

大塚「いいから座れ」

渋々隣に座る根津。

大塚「河本の件や。三田からウチにクレームが入ったらしい」

根津「それで万代が？」

大塚「クビやない。部長になれって言われたんや」

根津「部長に？だったら何で？」

グラウンドで練習する二軍の若い選手たち。

大塚「現場が好きなんや。机で一日どうこうするのは性に合わん。ましてやパソコンなんてようせんわ。まだこれ使ってるんやで」

と胸ポケットから鉛筆を出す大塚。

根津「でも」

大塚「断ったら万代のやつ、顔真っ赤にして怒ってたわ」

根津「辞めてどうするんです？」

大塚「兵庫におる息子夫婦から一緒に住んでほしいと言われててな」

根津「あの」

大塚「おまえをスカウトにねじ込んだって話か？本当や」

根津「同情ですか」

大塚「アホ。おまえにスカウトの才能がある

「と思ったからや」

根津「俺、見つけたんですよ」

大塚「なにをや？」

根津「ダイヤモンド。大塚さんにも見てもらいたくて」

大塚「それ見たいけどな、見たら辞めれなくなる。大事にせえよ、そんな選手に会えるのは一生に一人か二人や」

根津「俺は？俺はどうでした？光ってましたか？」

大塚「本当のこと言おか」

根津「…：はい」

大塚「ピカピカや。おまえは俺が見つけた中で一番やったわ」

去っていく大塚。

グラウンドで練習する二軍の選手たちが日の光に照らされている。

○北杜大学野球部練習場・入口

フェンスの前で野球部長と対峙している根津。

野球部長「ですからストレイドッグスさんには練習を見せるなと」

根津「それはわかってるんですが」

野球部長「わかってるなら帰ってください」

グラウンド内の三田、根津を見てあからさまに不機嫌になり顔をそむける。

根津「また明日も来ますんで」

野球部長「なんど来ても同じです」

○同・喫煙所

どうしたものか、という顔でタバコを吸う根津。吐き出した煙が曇り空に消えていく。

少し離れて立っていた西林俊朗（40）近づいてきて

西林「（空を見上げ）これは降るかもしれませんね」

根津「（警戒して）はあ」

西林「いいすか？切れちゃって」

と、煙草を吸うジェスチャーを見せる西

林。

根津「これでいいなら」

タバコを差し出す。西林、差し出されたタバコを二本抜き取ると一本を胸ポケットに、もう一本を口にくわえる。

西林「いいですか？」

とライターで火を点けるジェスチャー。

根津「どうぞ」

と百円ライターを渡す根津。西林、タバコに火を点けると自然にライターをポケットにしまう。

根津「あの」

西林「キツかったですよ？当たり前」

根津「え？」

西林「三田監督。当たり前キツかったですよ？」

根津「なんで知ってるんです」

西林「こういうもんで」

根津に名刺を渡す西林。名刺には「ワールドカワサキ興信所 西林俊朗」の文字。不審そうに西林を見る根津。

○同・駐車場

車へと歩いていく根津。追いかけてくる

西林。

西林「三田監督とは飲み仲間だね。けっこう親しくさせてもらってるんです」

根津「……」

西林「つけましようか、話？」

根津、車の鍵を開けようとして手を止める。

根津「話？」

西林「だから、僕が監督との仲をとりなしましようかってこと」

根津「できるんですか？」

西林「できるも何もツーカーですから。まあ、手ぶらでってわけにはいかないですけども。わかるでしょ？」

とお金を数えるジェスチャー。

根津「それはまあ」

西林、根津の顔の前に指を三本立てて

西林「三本」

根津「は？」

西林「だから、三本。わかるでしょ？」

根津「いや、わからないですが」

西林「嫌だなー、冗談でしょ？三十万」

根津「三十万？」

西林「グラウンドにも入れないでしょ。それぐらいはね」

根津「バカにするな」

根津、車に乗り込むと乱暴に発進する。

西林「ふっかけすぎたか」

西林、根津のライターでタバコに火を点ける。

○根津の車・中（夜）

運転席で大学の門から出てくる大学生をじつと見ている根津。

河本が部員たちと連れ立って門から出てくる。

根津、車を出ようとして、動きを止める。

門から戸上が出てくるのが見える。河本

たちとは反対方向へ歩き始める戸上。

河本と戸上を交互に見る根津。

根津「クソッ」

車から出る根津。

○道路（夜）

歩いている根津。その先を戸上が歩いている。

戸上、地下鉄へ続く階段を降りていく。

続いて降りる根津。

○地下鉄・車内（夜）

吊り革につかまって本を読んでいる戸上。

遠くの席でそれを見ている根津。

手帳に「趣味 読書」と書き込む。

地下鉄が停まりドアが開く。出て行く戸

上。続いて根津も出る。

○商店街（夜）

さびれた商店街を歩いていく戸上。すこし離れて根津が続く。

○市営団地（夜）

エレベーターのない古びた団地。階段をのぼっていく戸上。根津、それを見上げながら住所を手帳にメモしている。

○同・戸上家（夜）

四階のドアを開け、戸上が入る。

○同・居間と台所（夜）

食事している戸上。それを見ている戸上恭子（53）、ビールを飲んでいる。

戸上「なに？」

恭子「おいしい？」

戸上「フツー」

恭子「普通って何？」

戸上「フツ―はフツ―」

恭子「そう」

恭子、戸上をじっと見る。

戸上「なに？」

恭子「俊もやっと卒業かと思って」

戸上「そんなこと？」

恭子「だって十五年よ。パートからやっと正社員になって。大学だけでもお金かかるのに、あなたは能天気な野球やってるんだから」

戸上「能天気って」

恭子「そうじゃない」

戸上「食べたら出かけるから」

恭子、顔が曇って

恭子「また野球？いい加減辞めたら？就職活動は？やってる？」

戸上「秋季リーグ終わったら」

恭子「十月でしょ？間に合うわけないじゃないかい」

戸上「大丈夫だって」

恭子「プロ野球とか夢みたいなこと思っ
てないでしようね？世の中ってそんなに甘くな
いんだから」

戸上「箸を止め無言で立ち上がる。

恭子「ちよっと、ご飯は！」

出て行く戸上。

○市民公園・グラウンド（夜）

倉庫の鍵を開け、バッティングネットと
ボールの入ったバケツを出す戸上。バケ
ツからボールを取りバッティングネット
に向かって投げる。ブルペンで見たとき
と同じ豪速球である。

グラウンドの外、フェンス越しにそれを
見る根津。グラウンドに入り戸上に近づ
く。

根津「すごい球だな」

投球を止め、根津を見る戸上。

戸上「…誰です？」

根津、戸上に名刺を渡す。

戸上「プロのスカウトはこの時期接触禁止つ
て聞いてますけど？」

根津「あ、返してくれ、それ」

と名刺を財布に戻す根津。

根津「最近運動不足だな。ちよっと走ろうか
と思ったら、たまたま君がいた」

スーツ姿の根津を見て

戸上「その恰好で？」

根津「悪いか」

笑う戸上。

戸上「（なにか思い出して）ストレイドッグ

スの根津さんって」

根津「知ってるのか？」

戸上「テレビで見ましたよ。あの試合…
すぐにマズいことを言った、という顔に
なる戸上。

根津「気にしてない。今はただの新人スカウ
トだ」

戸上「なんで僕の所に？」

根津「だからランニングだ。ちよっとここで

休もうかと」

戸上「ご勝手に」

ふたたび投げ始める戸上。

根津「どうしてその球が試合で投げられない？」

答えずに投げる戸上。動揺したのかボールが大きく逸れる。

戸上「……」

根津「言いたくないならそれでいい」

応えずに投げる戸上。

根津「またここに走りに来る」

根津、グラウンドを去っていく。

○川崎ストレイドッグス事務所・会議室

根津、飯岡、遠藤らに混じって社長の万代が中央の席に座っている。いつも大塚が座っていた根津の隣の席は空いたまま。

万代「で、どうなんだ？河本は？」

根津「監督のガードが固く、まだなんとも」
万代「なんともって、練習ぐらいは見学させてもらえるようになってるよな？」

根津「いえ、まだ」

万代「何してるんだ？早くなんとかしろよ」

根津「すみません」

万代「それとも河本の担当から外れるか？」

他のスカウト陣を見回す万代。

遠藤「今からだと中々。それぞれ担当している選手もいますし」

万代「河本獲得が最優先だ。根津より仕事ができる奴が担当した方がいいだろ」

隣の空席を見る根津。

飯岡「僕がやりますよ」

自信満々で万代を見る飯岡。

飯岡「前田さんは片山の交渉で手一杯ですし、添木さんも西村さんも家族がいて、こっちに来るとなると大変でしょう。自分は独り身ですし、正直根津くんより交渉事は得意かと」

ムツときて飯岡をにらむ根津。

万代「いいだろう。じゃあ河本の担当は飯岡

君、君で……」

根津「(さえぎって) 私がやります」

スカウトたち、一斉に根津を見る。

根津「私にやらせてください」

飯岡「無理なんだよ」

根津「お願いします。社長、僕にやらせてください」

頭を下げる根津。

万代「三日でやれ。結果が出なければ交代だ」

○同・男子トイレ

小便をしている根津。その隣に立つ飯岡。

飯岡「なんだ？急にやる気出しやがって」

根津「前からだ」

飯岡「策はあるのか？三日だぞ」

根津「ある」

飯岡「嘘つけ、言ってみろ」

根津「いろいろだ」

飯岡「無いんだろ。三田はどんなタイプだ？

金で転びそうならさっさと転ばせろ」

根津「わかってる」

飯岡「わかってねえ」

同時にしずくを切る根津と飯岡。

飯岡「金で転ぶ奴は簡単だ。他の球団より金を積めばいい。厄介なのは金で転ばない奴だ」

根津と飯岡、隣同士で手を洗いながら

根津「それもわかってる」

飯岡「だったらいいけどな」

濡れた手をハンカチで拭く飯岡、服で拭く根津。

○根津のマンション・リビング(夜)

テレビ画面に、ビデオで撮影した河本の投球が映っている。根津、携帯電話を手にして

根津「根津だ。三田監督の件、頼みたい。…バカいえ。練習見るだけでそんな金払えるか。…十だ。それ以上は出さない」

電話を切り、テレビ画面の河本を見なが

ら缶ビールを飲む。
画面、河本の投球からブルペンでの戸上の投球に変わる。ブルペンの戸上が速球を投げる。
グッと身を乗り出して手帳に何か書き込む根津。
応援団の鳴らすトランペットと太鼓の音、どこかから聞こえてきて――。

○川崎ストレイドッグス野球場・グラウンド内（八年前）

外野席に陣取った応援団がトランペットと太鼓をならしている。グラウンドで守備に就いているストレイドッグスの選手たち。

マウンド上の根津（23）、キャッチャーのサインにうなずくと、躍動感のあるフォームから速球を投げる。空振りするバッター。

アナウンサーの声「またまた三振！プロ初登板の根津、これで七つ目！」

電光掲示板に並ぶゼロの数字。

アナウンサーの声「ここまでヒット二本に抑える見事な投球です。ここまでの根津の投球、いかがですか？」

解説者の声「素晴らしいですね。球が手元でグッと伸びるんでみんな振り遅れてますよ」

根津が速球を投げる。ファールフライが上がる。ボールめがけて根津、ダイブ！フェンスに激突して倒れた根津のグラブからボールがこぼれる。

アナウンサーの声「ボールがこぼれた！根津、立ち上がれませんか、立ち上がれませんか」

倒れたままの根津の左肘がおかしな角度で曲がっている。
携帯電話の着信音が鳴っている。

○根津のマンション・リビング（朝）

携帯電話の着信音が鳴っている。
ソファで眠っている根津、起きて電話を

とる。
根津「来週？ダメだ。今日か明日の夜でなんとかしら」

○川崎駅近くの繁華街（夜）

居酒屋やキャバクラ、風俗の看板のネオンが煌々と輝いている。客引きの男たちの声を無視して足早に歩く根津。「プラチナクラウン」と書かれた看板の前で足を止め、地下の入口へ降りていく。

○ラウンジ・プラチナクラウン・中（夜）

入ってくる根津。

ボックス席に座る三田監督と西林。二人を囲んで座るラウンジ嬢たち。

西林「根津さん、こっちこっち」

根津、三田に近づいて、

根津「川崎ストレイドッグスの根津です、先日は大変失礼しました」

深々と頭を下げる。

三田「こんな席だ、そんなに固くなるな。ほら」

と水割りのグラスを渡す三田。

根津「いただきます」

水割りに口をつける根津。

三田「おい景気悪いな。こういうときは一気だろ一気、なあ」

根津、水割りを一息に飲み干す。

三田「そうそう景気よくいかないよ。ほらもう一杯つくってやって」

根津「ありがとうございます」

西林「今日はこの人のおごりだから、みんな飲んで飲んで」

ラウンジ嬢「えー、いいんですか。じゃいただきますー」

三田「どうした、怖い顔して」

根津「いえいえ、なんでも」

次々にお酒を頼みだすラウンジ嬢たち。

三田「で、根津さんに相談なんだが」

根津「はあ」

三田「女房が最近ゴルフにはまってな。ゴルフクラブのセットが欲しいって言うんだが」

根津「はあ」

三田「俺はゴルフやらないからわからなくてな。根津さんが選んでくれると助かるんだが」

根津「いや、私もゴルフはちょっと」

根津の足を小突て目配せする西林。

西林「それはもう、もちろん。ねえ根津さん」

根津、気づいて水割りを飲み干す。

根津「ええ。それはもちろん」

三田「すまんね。それと娘の誕生日も近くてな」

根津「娘さんの誕生日？」

三田「エルメスのなんやらしいバッグが欲しいって」

根津、おかわりの水割りを飲み干して

根津「ではこちらでお贈りしますよ。あの、おかわりもらえますか？」

西林「さすがですね、根津さん！」

三田「話がわかってるな」

西林「そういえば、ここのツケもたまってたんじゃない」

根津、注がれた水割りを再び飲み干して

根津「それもちろん！」

三田、根津にグツと顔を近づけて腕時計を見せる。

三田「この時計はな、俺の教え子がプロに入った契約金でくれたものだ。俺の誇りなんだよ。二度とバカにするな」

根津「……はい」

三田「練習は見に来てもいい。だが部員に話しかけたりはするな。連盟がうるさいからな」

根津「ありがとうございます！」

三田「仕事の話はこれで終わりだ」

根津「あの、もうひとつ」

三田「なんだ？河本のことか？」

根津「聞きたいのは戸上のことです」

三田「戸上？あいつの投球を見たのか？」
根津「ブルペンで」

三田「驚いたろ？だが試合になるとさっぱりだ。もう無理かもしれん」

根津「無理？どういふことなんです？」

三田「スカウトだったら新聞読んで勉強しろ。さあ仕事の話は終わりだ終わり！」

とラウンジ嬢の肩を抱く三田。

○川崎ストレイドッグス事務所・スカウト部

遠藤のデスクの前に立っている根津。

遠藤「こんな領収切れるわけないだろ、常識
考えろ、常識」

根津「はあ」

遠藤「なんだ、その目は？」

根津「社長が三日で許可を取れと」

遠藤「それとこれとは話が別だろうが！ゴルフセットとバッグ代って。よく出せたな、
こんなもの」

根津「あの、ラウンジの代金だけでも」

遠藤「なんでウチがツケまで払うんだよ」

根津「いや、まあ、その」

○同・廊下

トイレからでてくる根津。入ろうとした
飯岡と鉢合わせる。

飯岡「お、ドラフト一位、ちよっとはシヨン
ベン仕事もできるようになったみたいだな」
根津「五位が生意気な口きくな」

根津、言いながら服で手を拭く。飯岡、
それを見て嫌な顔。

根津「なんだよ」

飯岡「金も上手に配らないとおまえが先に
つぶれるぞ」

根津「言ってる。河本の逆指名は俺が獲るか
らな」

飯岡「まだ練習見れるようになったただけだろ。
はしやぎすぎなんだよ」

飯岡、トイレに入って行く。

○川崎市立図書館・中

数年前の新聞を調べている根津。スポーツ欄の隅にある記事を見て新聞をめくる手が止まる。

根津「！」

『頭部に死球、選手担架で運ばれる
関東大学野球春季リーグでの北杜大学と
享成大学の試合で北杜大・戸上投手の投
げた球が享成大・木嶋君の頭部に直撃。
木嶋君は病院に運ばれ現在も意識不明の
重体……』
思案顔の根津、窓を見るとオートバイが
駐輪場に停まるのが見える。何かピンと
きた様子。

○市民公園・グラウンド（夜）

昨日と同様にバッティングネットに向か
って投球練習する戸上。

と、ジャージ姿の根津がバットとバグ
を手に近づいてくる。

戸上「前の恰好よりマシですね」

根津「ボールが当たった選手は回復して後遺
症もなかったそうじゃないか」

表情が固くなる戸上。

戸上「調べたんですか」

根津「仕事をしただけだ」

戸上「人の過去をほじくり返す仕事して楽し
いですか」

根津「悪趣味なんでね」

根津、ネットの脇に立つとバグからフ
ルフエイスのヘルメットを取り出し被り
バットを構える。

根津「これなら大丈夫だろ？投げてこいよ」

戸上「本気ですか？」

根津「冗談でこんな恰好できるか」

戸上、根津に向かって球を投げるが、や
はり思いきり投げられない。

根津「なんだそりゃ？リトルリーグか？」

戸上、もう一球投げるが簡単に根津に打
ち返される。

根津「それじゃ草野球のジジイにも打たれるぞ」

戸上「うるせえな、コンビニ強盗」
戸上、さらに投げる。

○北杜大学野球部練習場・グラウンド

トレーニングする部員たち。その中に河本と戸上の姿。腕組みをしてそれを見る三田監督。少し離れて根津、他球団のスカウトが二人ほどこいる。河本、投球練習中に肘をさわって首をか

しげている。
雑談して見えていない他球団のスカウト。
ひとり河本のしぐさに注目している根津。

× × ×
練習が終わり更衣室へと歩く戸上ら部員たち。根津、さりげなく戸上の横に並ぶ。
根津「今日もやるぞ」

○市民公園・グラウンド（夜）

ヘルメットをかぶった根津がバットを持って構えている。

戸上が投げた球を打ち返す根津。
根津「それが本気か？ だったらさっさとやめろ！ くやしかったらここに向かって投げてみる」

とヘルメットを指さす根津。

豪速球がバッティングネットのど真ん中に突き刺さる。根津、ピクリとも動けない。

× × ×
ベンチに座っている戸上。
コンビニ袋を持った根津が来る。

根津「ほら飲め」

と缶ビールを差し出して自分も飲む。

根津「労働の後ほうまいな」

戸上、一口飲んで

戸上「うめえ」

根津、戸上に手帳を見せる。

手帳には、ブルペンと試合での戸上のピ

ツチングフォームの違いやが細かく書か
れている。

根津「地道にやって体で覚えさせるんだな」
ページを破り戸上に渡す根津。

戸上「なんでここまで」

根津「仕事だ」

戸上「人の過去ほじくるだけじゃないんです
ね」

根津「俺はケガで野球できなくなったからな。

若い奴には後悔してほしくないんだよ」

戸上「キャッチボールしてくれませんか」

根津「なんだよ」

戸上「憧れなんです、父親とキャッチボール
するのが」

根津「父親？俺はまだ三十だぞ」

戸上「てつきり四十代かと」

根津「どうせ俺は老けてるよ」

戸上「ウチの父、野球嫌い。他の家みたい
にキャッチボールしたこと無いんです」

根津「一度もか？」

戸上「八歳の時に離婚して家出ていったから」

根津、足元のボールをひよいと戸上に投
げる。

戸上、根津に投げ返す。

根津、グラブをはめて立ち上がると戸上
にボールを返す。二人の距離、徐々に広
がっていく。

戸上からのボールをキャッチした根津、

根津「おまじない教えてやるよ」

戸上「おまじない？」

根津「そう、おまじない」

根津、左胸を拳でトントンと二回叩くと、
戸上にボールを投げる。

戸上「なんです？それ」

根津「ここを凌げばなんとか勝てる、そんな
ときにやるんだ。不思議と効くんだ」

戸上、左胸を拳でトントンと二回叩いて
ボールを投げ返す。

根津「そうだ。使うのは一番しんどいとき。
勝負の時だ。忘れるな」

○市民球場・バックネット裏

いつもの席に座っている根津。
マウンド上の河本、ボールを投げた直後、
肘を押させてしやがみ込む。
ざわつく球場。
三田、出てきて審判に投手の交代を告げ
る。

アナウンスの声「ピッチャー、河本君に替わ
りまして戸上君、戸上君」

審判がプレー再開の声を上げる。戸上が
ストレートを投げ込む。が、大きく逸れ
るボール。なんとか捕球するキャッチャ
ー。

根津「落ち着け、落ち着けよ」

戸上、大きく息を吸うと左胸をトントン
と叩く。

もう一球。豪速球がキャッチャーミット
へ突き刺さる。静寂の後、どよめく場内。
さらにもう一球。大きく空振りするバッ
ター。

投げるたびに場内の歓声が大きくなって
いく。

バッターを三振に取る戸上。

大歓声の中、おもわずガッツポーズする
根津。

○北杜大学野球部練習場・グラウンド

練習を見学している根津。

その近く、ずらりと並んだ他球団のスカ
ウトたち。

スカウトA「河本、今年の復帰は難しいいらし
いな」

スカウトB「まったく運がないよな。よりよ
って四年の時にに靱帯やるとはな」

スカウトC「ドラフトの目玉が消えたってわ
けか」

スカウトD「目玉はいるじゃないか」

スカウトA「あんなすごいピッチャーを見逃
してたとは」

スカウトB「ありや河本以上かもな」

戸上の投球を見るたび、口々に感嘆の声を漏らすスカウトたち。

グラウンドの隅でランニングする河本、それを面白くない顔で見ている。

「あれがお前のダイヤモンドか？」

振り向く根津。後ろに立っているのは大塚である。

根津「大塚さん！どうしてここに？」

大塚「どうしてって、スカウトの仕事は選手を見ることやろ」

根津「え？じゃあ」

大塚「息子の嫁と反りが合わんでな。スカウト復帰や」

と、根津に名刺を差し出す大塚。

名刺には『東京ボイジャーズ・スカウト大塚勝栄』の文字。

根津「ボイジャーズ？そりやないでしょう！」

大塚「なんや、もっと喜んでくれや」

○同・ベンチ側

三田に話をしている河本。

河本「今日は早上がりで休ませてもらおうかと」

三田「わかった。じっくり直せばいい。無理だけはするな」

一礼してグラウンドを出て行く河本。

○同・更衣室

河本、戸上のロッカーを思いきり蹴り上げて出て行く。

○同・グラウンド

大塚「三田も金渡したらクルツと手の平返したわ。コツコツ足運んで心が通じたと思つてた子を金の力でたくさん奪われたんでな、今度はこっちが奪う番や」

根津「らしくないですよ」

大塚「そらお前もやないか？なんでここで練習見れとるんや」

根津「……」

大塚「投球練習する戸上を見て

大塚「確かにええ選手や。こら欲しなるわ」

根津「大塚さんでも譲る気はないですから」

大塚「そらあの子の気持ち次第やろ」

根津「わかってますよ」

大塚「どうやらな」

自信ありげな大塚に不安げな顔になる根津。

戸上が投げた速球がキャッチャーミットに突き刺さる。

○同・入り口（夜）

練習を終えた戸上にサインを求める女子大生たち。

戸上、根津に気づいて近づいてくる。

根津「今日もやるか？夜間練習」

戸上「今日はちよっと」

根津「そうか。じゃ飯でも行くか」

戸上、深刻な顔で

戸上「ちよっといいですか」

根津「？」

○喫茶ボンソワレ・中（夜）

向かい合って座る根津と戸上。

根津「調子いいみたいだな。次も先発は確定だろ」

戸上、押し黙っている。

根津「どうした？話せよ。遠慮する仲じゃないだろ？」

戸上「学費が、その」

根津「払えないのか？」

戸上、コクリとうなずく。

根津「いくら足りない？」

戸上「四十万」

根津「四十か……。助けてやりたいが、金を渡すのはちよっとな」

戸上「……」

根津「親戚とかにあたれないのか」

戸上「……相談してみます、すみませんでし

た」

席を立ち、金を払おうとする戸上。

根津「ここはいいから」

戸上、店を出て行く。

○商店街

人ごみを避けながら根津が走っている。

前方に戸上の姿が見える。戸上に追いつ

くと周囲を伺いながら

根津「これ。十万入ってる」

と、銀行の封筒を戸上に渡す。

戸上「……すみません」

と頭を下げる戸上。

根津「いいから早くバッグに入れて」

急いでバッグに封筒を入れる戸上。

根津「スカウトとしてじゃない。友人として

だ」

去っていく根津。

○川崎ストレイドッグス事務所・会議室（二

〇〇〇年六月）

T『二〇〇〇年六月』

根津、万代、遠藤、飯岡、前田らスカウ

ト陣が座っている。

根津「四月から河本の登板はありません。右

肘のケガが長引いてるようです」

遠藤「こりや河本の獲得は様子を見た方がいい

いですね」

万代「代わりの選手はいるのか？」

根津「河本の控え投手だった戸上を推薦しま

す。春季リーグでは六試合投げて防御率一

点台、三振も平均で十個奪っています」

遠藤「いいじゃないか」

根津「ただ他球団、特にボイジャーズが本腰

入れて狙っていると聞いてます」

飯岡「ボイジャーズ？大塚さんか。星野の片

山にも横槍入れているって話じゃないですか

？」

前田「まいつてるよ、ホント」

遠藤「こりやウチへの復讐だな」

万代、ギロツと遠藤をにらむ。
万代「根津、その戸上つての必ず獲れ」

○高級焼肉店・個室（夜）

大塚と焼き肉を食べている戸上。

大塚「どや？舌の上でとろけるやる？」

戸上「こんなやわらかい肉食べたの初めてです」

大塚「そらよかったわ。野球選手は体が資本やからな、こういう質のええ肉食わな」

戸上「大塚さんには学費から何からお世話になつてしまつて。本当にありがとうございます」

大塚「なにを言うてんのや。わしは若い子が金で苦労するの見たないだけや」

クレジツトカードを渡す大塚。

大塚「毎月五十万振り込むからな、自由に使つてや」

戸上「いや、でも」

大塚「ええんや。若い子は遠慮したらあかん。

これはウチからの好意や。それより今日は大人の遊び、たっぷり教えたるからな」

と、卑猥なハンドサインを見せて下品な笑みを浮かべる大塚。

戸上「……ありがとうございます！」

○市民公園・グラウンド（夜）

ベンチに腰掛けスポーツ新聞を読むジャージ姿の根津。新聞には戸上がまた好投した記事。腕時計を見る根津。手帳を取り出しカレンダーの日付に×をつける。この一カ月ほど、すべて×が書かれていく。

誰もいないグラウンドを見て溜息をつく根津。

○戸上家・居間・台所（夜）

飲みかけのワインとグラス、酎ハイの空き缶などが散乱しているテーブルで突っ伏して寝ている恭子。

戸上、入ってくる。恭子を見て溜息。

戸上「また飲んでるのかよ」

恭子、目を覚まして

恭子「またってあんたもでしょ？ここのところ毎日じゃない」

戸上「俺のは付き合いなんだよ」

恭子「私だって付き合いぐらいあるわよ。今日だってほら」

とテーブルのパンフレットを見せる。パンフには先物取引、株の投資などが書かれている。

戸上「何それ？サインとかするなよ」

恭子「別にいいでしょ、サインしても」

戸上「したの？」

恭子「だって、お金貸してくれるっていうから」

戸上「担保は？俺の契約金だろ？そういうの俺に聞いてからやれよ」

恭子「いいじゃない。プロ入ったら一杯お金貰えるんですよ。今日も来てたわよ、関西やら九州やら。お母さんだってちゃんと考えてるだから」

とスカウトたちの名刺をばらまく恭子。

戸上、軽蔑の目で恭子を見る。

恭子「またバカにして。その眼、あの人とそっくり」

戸上「あの人って父さんのこと？」

恭子、戸上をにらむ。

戸上、吐き気がこみあげ居間を出て行く。

○同・トイレ

便器に突っ伏して何度も吐く戸上。吐しゃ物がなくなり胃液だけになっても吐き続ける。

○北杜大学野球部練習場・グラウンド

投球練習をする戸上。バウンドした球を取り損ねる近藤。戸上、舌打ちして

戸上「捕れよ、それぐらい」
近藤「ごめん」

戸上「だからずっと補欠なんじゃない？」

近藤「……ごめん」

戸上「二年、キャッチャー替わって」

戸惑っている二年生。

戸上「早くしろ！」

サッと走ってくる二年生部員。

二年生「よろしくお願いしますっ！」

戸上「ちゃっちゃんと動けよ、ちゃっちゃんと」

近藤「すまん」

二年生部員に球を渡す近藤。

遠巻きに戸上を見る部員たちのしらけた顔。

○焼肉屋ジャンジャン・中

二時間食べ放題の大衆店。店内に煙が充満している。生ビールを飲みながら食べ

ている根津と戸上。

根津「プロになるんだったら量食べて体作らないと。うまいだろ？」

戸上「え、まあ」

苦笑いを浮かべる戸上。

根津「やっぱ元気なさそうだな。じゃんじゃん食え。おごりなんだから」

戸上「……」

戸上、ペラペラの肉を箸でつまむと鼻で笑って皿に戻す。

根津「全然食べてないな？夏バテか」

戸上「そろそろ店でませんか」

根津「どっか行きたいところもあるのか」

戸上、卑猥なハンドサインを見せて下品に笑う。

○走るタクシー・中

後部座席に座る根津と戸上。

根津「すっきりしたか？」

と少なくなつた財布の中身をチェックしている根津。

戸上「根津さん、誠意って何だと思えます？」

根津「何だよ急に」

戸上「僕は金だと思えます」

根津「……」

戸上「やっぱりボイジャーズは金持ちですね」
戸上、財布から数枚の名刺を出して根津に渡す。

高級焼き肉店、銀座のクラブ、高級ソープランドの名刺である。

戸上「根津さんの僕への評価は食べ放題の焼肉と格安ソープってことですね」

根津「ウチと天秤にかけて契約金吊り上げようって腹か？ずいぶんセコい手使うようになったな」

戸上「次はこれくらいのお店お願いしますよ」
根津「金で決めるならボイジャーズに行け。

ただな、あそこはウチみたいにじっくり育ててくれない。一、二年でダメなら捨てられる」

戸上「なら一年で結果を出せばいい」

根津「プロはそんな簡単じゃない」

戸上「俺は根津さんじゃない」

根津「…：：：そうか」

戸上「すみません」

根津「いや、いいんだ」

戸上「ボイジャーズだけじゃないです。僕が入団したら母が働いてるスーパールの権利をくれるって話もありましたよ。親会社の系列店なんですよ、そのスーパー。母がはしやいじやって」

車窓から見えるネオンの光が流れていく。

戸上「俺を捨てた奴に見せてやりたいですよ」

根津「父親に会いたいか？」

戸上、根津を見る。

○北杜大学野球部練習場・グラウンド

T『二〇〇〇年八月』

ベンチに座っている三田の前に立っている河本。二人、激しく言い合っている。グラウンドを走りながら遠目でそれを見る部員たち。

部員A「河本どうかしたの？」

部員B「先発直訴だった」

部員C「肘痛いんですよ？」

部員B「戸上が確変入ったからあせてんでしょ」

部員A「もはや元エース」

部員C「スカウトも戸上ばっか見てるし、そりゃあせるでしょ」

黙々とグラウンドをひとり走る戸上。

○市民球場・グラウンド

マウンド上、肩で息をしている河本。

スコアボード、二回の裏で四対〇。北杜がリードされている。

河本の投げた球、外れてフォアボール。

三田がベンチから出て審判に投手の交代を告げる。

マウンドへ向かう戸上、河本とすれ違う。

戸上「(ボソツと) 使えねえな」

河本、カッときて戸上につかみかかる。

駆け寄ってくる内野陣。手を離しベンチ

へ戻っていく河本。

× × ×

日の暮れた球場。

グラウンドキーパーが土をならしている。

スコアボードは四対五で北杜の勝利を表している。

○同・更衣室

ひとり着替えている戸上。

河本が入ってくる。

戸上「尻ぬぐいのお礼ですか？」

河本、無言で戸上を見ている。

戸上「あれぐらいの相手に四点も取られちゃうって大変ですね」

河本、近づいて戸上を突き飛ばす。

転倒する戸上。

河本「お前が俺よりスゲえわけ無えんだよ」

戸上「痛てえな。現実みるよ。おまえ、もう終わってんだよ」

戸上「勘違いしてるのはお前だろ」

河本、戸上につかみかかる。もみ合いになる二人。

河本「雑魚が、勘違いするなよ！」
河本、戸上の頭をロッカーに打ちつける。
河本を思いきり突き飛ばす戸上。
ガラス窓が割れ、河本が倒れる。
痛めている肘にガラスが突き刺さっている。
床に血が流れていく。

○北杜大学野球部練習場・グラウンド

青々とした空にかかる入道雲。用具を片付ける近藤ら部員たち。

部員A「知ってる？河本」

近藤「あ、うん」

部員B「靱帯切ったって？無理だな今年のドラフト」

部員A「どころか今後野球できるかどうかっていう話」

部員B「マジか。てかマヌケすぎでしょ、更衣室でコケたって」

部員A「それ聞いた？」

近藤「何？」

部員A「言うなよ」

部員B「何々？」

部員A「本当はやったの戸上だって」

近藤「！」

部員B「どういうこと？」

部員A「戸上がガラスで刺したんだって」

部員B「エグッ」

グラウンドに目をやる近藤。戸上がひとり黙々と走っている。

○工場地帯（夜）

ゴーツと音を立てて貨物列車が通り過ぎていく。
フェンス越しに照明に照らされた化学工場が見える。
その前に西林と根津。
西林、ファイルに閉じた書類を根津に渡す。

西林「戸上の父親の件です」

根津「すまんな」

西林「仕事なんで。金さえもらえれば全然」

根津「これ」

と封筒を渡す根津。さつと中身の札を数え始める西林。

西林「着手金十に成功報酬十。きっちり二十。確かめました。領収書どうします？」

根津「一応くれ」

西林「落ちるんですか？社長がシブいらしいじゃないですか」

根津「そういうのだけは詳しいな」

西林「商売なんで。ちなみにその社長さんなんです。いろいろウワサを聞いてますよ」

根津「ウワサ？」

西林「そう、黒いやつ」

根津「詳しく聞かせろよ」

根津に手を出して金を要求する西林。

根津「（あきれたように）おまえ」

しわくちやの札を渡す根津。

根津、西林の話に聞き入っている。

貨物列車が通り過ぎる。

○河川敷の野球場

少年野球チームの試合を見ている根津と戸上。

走るランナーにサードコーチヤーがグルグルと腕を回している。

戸上、サードコーチヤーを見て

戸上「あんなに騒いで。野球嫌いだったくせに」

根津「よかったじゃないか、好きになっただけ」

戸上「別にどっちでも」

ホームインした子どもにハイタッチしているサードコーチヤー。

○同・駐車場

先ほどのサードコーチヤーが野球道具を車のトランクに入れていく。

近づいていく根津と戸上。

根津「田島さん、先日電話した根津です」

田島「どうも。もうすぐ終わるんで少し待っててもらえれば」

田島和夫（55）、チラリと戸上を見て頭を下げる。

○居酒屋わっちゃん・中（夜）

近所に住む住人が気軽に通う店、といった店内。

座敷の席でビールを飲む田島、根津、戸上。

田島「元氣そうでよかったよ。十三年、いや十四年ぶりか」

戸上「……」

田島「すまなかった」

と頭を下げる田島。

戸上「あけてよ、頭」

田島「すまない。プロから声かかかってるなんて、すごいじゃないか」

戸上「大したことないですよ。……父さんは今何を？」

田島「小中学生向けに学習塾をな」

戸上「塾？」

田島「そう。低価格で誰でも通えるような塾。稼ぎは多くないが子供たちの笑顔を見るのが楽しみで」

根津「いい事やってるじゃないですか」

田島「離婚して気づいたんです。会社での出世とか、他人より一円でも多く稼ぐとか、そんなこと子供の笑顔に比べたら、何の価値もないって。本当にバカでしたよ」

根津「野球のコーチの方は？」

田島「再婚した妻の子供が野球やっててな。

それでいつのまにかコーチまで」

戸上「子供いるんだ」

田島「……ああ、すまん」

戸上「別に謝ることじゃないから」

田島「それで少し相談なんだが……」

戸上「何？」

田島「さっきも言った通りウチの塾は月謝を安く抑えてて。このところ経営が厳しくて

な」

戸上「俺に金を貸せって？」

田島「……銀行にも融資を断られて。本当に勝手な話だが」

戸上「本当だね。養育費もまともに払わなかったくせに」

田島「すまなかった、どれだけ時間がかかっても」

と頭を下げる田島。

戸上「いまさらいるかよ。俺だって今金があるわけじゃない。契約金貰うにもあと半年はかかる」

田島「だから、それはその、根津さんが」

根津の方を見る田島。

根津「ウチに入ってくれるならお父さんの塾に出資を検討していい。どうだろう？」

戸上「なんだよ、根津さんもグルかよ。汚ねえんだよ、やり方が」

根津「いや、お父さんが困っていたから」

田島「俊太郎、お願いだ。子供たちを救うと思ってる」

戸上「自分の息子からは逃げたのにか」

田島「それは」

戸上「それをごまかすためにガキの笑顔がどうとか言ってるだけだろ」

田島「俊太郎……」

戸上「ここに来てよかったよ。おまえのみじめな姿が見れたからな」

立ち上がり田島を見下ろす戸上。

○道路（夜）

根津と戸上、歩いている。

根津「すまなかった」

戸上「別に関係ないですから」

タクシーを止める根津、戸上に乗るよう促す。

根津「関係ある、会わせたのは俺だ」

タクシーに乗る戸上。

戸上「根津さんも一緒ですよ」

根津「どういう意味だ」

戸上「あなたが逃げたのはいつです？引退したときですか？」

根津「やめろ」

戸上「それともケガしたあの試合ですか？」

根津「やめろ！」

戸上「俺が欲しいなら金を積んでくださいよ。

ボイジャーズより高い金を。それが俺の入団条件です」

ドアが閉まり発車するタクシー。

○同・社長室・中

万代と対峙している根津。

万代「そんな大金出せるわけないだろう！」

根津「しかし、戸上を獲るにはこれぐらいは」

万代「ウチがお前を獲るときどれだけ払ったと思ってる？さらに金を出させる気か？」

根津「それとこれとは」

万代「勘違いするな、おまえはお情けでここにいるんだ。立場をわきまえろ！」

カッときて拳を握る根津。

万代「なんだ？」

だが、こらえて頭を下げる。

根津「いえ、すみませんでした」

○川崎ストレイドッグス事務所・スカウト部

電話が鳴っている。受話器を取る飯岡。

根津、入ってくる。

飯岡「根津、電話」

受話器を差し出す。

根津「誰？」

飯岡「根津を出せ、としか」

受話器を取る根津。

根津「もしもし、根津ですが」

恭子の声「あなたが根津さんですか」

電話の声、酔っている。

根津「ええ、根津ですが」

恭子「うちの俊が、大変お世話になってるよ
うで」

根津「戸上くんのお母様で？」

恭子「スカウトって探偵まがいのこともある

んですか」

根津「はい？」

恭子「しらばっくれなくてもええです？言つときますけどあの人はウチとは関係ないですから」

根津「あの、お父さんの件は」

恭子「関係ないって言っているだろ！おい、聞いているのか！」

根津「すみません」

恭子「おまえのそこには、絶対に！俊太郎は入れさせない！わかったか！」

電話、切れる。

根津、受話器を叩きつける。根津を見る周りのスカウトたち。

○同・屋外喫煙所

タバコを吸っている根津と飯岡。

飯岡「試合終了って感じだな」

根津「戸上を落とすには金が必要だ。だがウチはボイジャーズを上回るほどの金はお出せない。手詰まりだよ」

飯岡「今年は選手の年棒もかなり抑えるって話だ。万代がこの調子で二、三年やれば球団の赤字もなくなる。それで本社に返り咲きか。その頃にはウチの戦力はガタガタ、責任は俺らスカウトがひっかぶる」

根津「どうせ俺はこのオフにクビだ」

飯岡「……」

根津「いつだ？」

飯岡「何が？」

根津「前に俺が逃げたって言ったよな。いつ逃げた？」

飯岡「ケガのあとだ。手術して引退するまでの三年間、おまえはずっと逃げ続けてた」

根津「それはケガで肘が」

飯岡「お前のケガは治ってた」

根津「！」

飯岡「恐かったんだろ。実力がバレるのが。自分が通用しないってわかるのが。ケガに泣かされた悲劇のヒーローを演じる方が楽

だからな」

根津「貴様！」

根津、飯岡の胸ぐらを掴む。胸ぐらを掴み返す飯岡。

飯岡「大学でも、二軍のグラウンドでも、俺はずっとお前を見てた。あれから何か本気でやったことあるのか？」

手を放す根津。

根津「このままいったらクビだ。なんでもやるさ」

灰皿に煙草を投げ捨てる根津。

○北杜大学野球部練習場・グラウンド（二〇〇〇年十月）

T『二〇〇〇年十月』

グラウンドを走る戸上。

その後ろを近藤がついて走る。

戸上、振返って近藤に気づく。

二人、並んで走る。

○万代の家・前の道路（朝）

『万代』と書かれた表札。

近くの道路に駐車している西林の車。

○西林の車・中（朝）

運転席、トレパン姿の西林、じっと万代の家の門を見ている。

西林「もうすぐ八時半だぞ」

倒れていた助手席のシートが起こされ、寝ていた根津が顔を見せる。

根津「出たか？」

西林「まだ」

根津「なら起こすなよ」

西林「出た！」

フロントガラスの向こう、万代の家からゴミ袋を両手に持った万代の妻・美里（34）が出てくる。

根津「あと十秒待て。九、八、七、六」

○万代の家・前の道路（朝）

ゴミ捨て場へ歩いていく美里。
根津の声「五、四、三」

○西林の車・中（朝）
根津「二、一、GOッ！」
運転席から飛び出す西林。

○万代の家・前の道路（朝）
トレパン姿の西林がランニングしてゴミ捨て場の方へ。戻ってきた美里に軽く会釈してすれ違う。
家へ入る美里。
運転席に移った根津、車をゆっくりと発進させる。

○ゴミ捨て場（朝）
ネットから美里が捨てたゴミ袋を掴む西林。
根津が運転する車、止まってトランクが空く。
西林、トランクにゴミ袋を二つ投げ入れ、助手席へ。
車、発進する。

○高架下（朝）
西林の車が停まっている。
軍手をした根津と西林がゴミ袋を漁っている。
根津「テイッシュユばっかだ。もう一カ月だ。こんなこと続けて意味あるのか」
とゴミ袋から丸まったテイッシュユをつまむ根津。
ふたり、ゴミを漁りながら
西林「裏金つてのは立証が難しいんですよ。証拠になりそうなものとはとにかく集めたいんです」
根津「脅す材料に使うだけだろ」
西林「一発勝負ですからね、相手が折れなかったら根津さん終わりですよ」
根津「そのときはおまえの所でよろしくな」

西林、根津を見て

西林「来てくれたらうれいすよ」

根津「バカ言うな、誰がこんな……これは？」
と破れた書類の一部を西林に見せる。

西林「通知書って書いてますね。他にないですか」

根津「これは？」

西林、破れた書類をあわせる。

西林「口座：振替通知書……、貸金庫のですね」

根津「だったら？」

西林「裏金は足がつかないよう現金でのやり取りがほとんどです。保管は銀行口座じゃなく自宅か貸金庫に」

根津「じゃあ万代がクラブハウスの件でリベート貰ってるって噂は？」

西林「可能性は高いですが、これだけじゃ全然」

根津「意味無いってことか」

西林「無いことはないですが、もっと決定的なものがあれば」

根津「どうすんだ？」

西林「ここからは私の仕事なんで」

○小料理屋・中（夜）

万代、後藤設計事務所の井川（34）と話している。

井川「今年はエースの夏木も調子いいですし、Aクラスは狙えるんじゃないですか」

万代「あんまり勝ってもらいと困るんだ。とにかくあいっら選手は口を開けば金、金、金だ」

井川「おっしゃるとおりで」

万代「野球選手なんでもんに球団経営の難しさなんてわかるわけがないんだよ、子供の頃から球遊びしてるだけだからな」

井川「そこそこ勝って、客がたくさんってやつが一番ですね」

万代「その通り。これで優勝なんてされたらうるさくてたまらんね」

ガラッと扉が開いて

西林「みんなく酔っぱらっちゃったよ」と座敷に倒れ込む男。

西林である。

井川「君！部屋間違えてるだろ」

西林「あれ？あ、すみませんでした」

立ち上がる拍子にテーブルの下にICレコーダーをくつつける。

万代「この客層も落ちたな」

井川「来月は別の所を……」

○西林の車・中

運転席の西林、助手席でリクライニングを倒して寝ている根津。

ボイスレコーダーから万代と井川の声が流れている。

井川の声「受注費の二割を上乗せしてリベトでというのは中々やはり」

万代の声「その条件を飲んだから後藤設計に決めたんだ。いまさら値下げするのは話が違う」

井川の声「しかしウチも今、厳しくて」

万代の声「だから分割でいいと」

西林、レコーダーを停止して

西林「どこもかしこも金、金、金ですね」

根津「まったくだな」

西林「次は根津さんの番です。引いたら負けですよ。とにかくガツンとかましてください」

根津「わかってる」

○川崎ストレイドッグス事務所・廊下

書類を手に根津が歩いていく。

社長室のドアの前で止まる。

深く息を吸うと、胸をトントンと二回叩く。

ドアをノックする根津。

○定食屋・中

チャーハンにがつついていている西林。

テーブルに置いた携帯電話が震える。
西林「はい西林。……やりましたね！」
ガッツポーズ。

○同・会議室・中

根津、飯岡、前田らスカウト陣が座っている。中央に万代。

苦虫をかみつぶした顔の万代。

万代「戸上については、契約金の上限一億五千万。それからボイジャーズ対策として別途三億五千万……」

どよめくスカウト陣。根津を見てニヤリと笑う飯岡。

遠藤「くれぐれもマスコミには漏れないように」

万代「根津くん、ウチの球団では一番の契約金になる。なんとしても戸上を獲るんだ」

根津、平然とした顔で頭を下げ

根津「ありがとうございます」

○北杜大学野球部練習場・グラウンド

戸上にボールをひょいと投げる近藤。

戸上「なんだよ」

近藤「キャッチボール」

戸上、ボールを近藤に投げ返す。

近藤、投げ返す。

笑いながら投げ返す戸上。

二人のキャッチボール、続く。

○地下鉄・車内

吊り革につかまっている根津。

地下鉄が停まりドアが開く。出て行く根津。

○商店街

さびれた商店街。平日の昼にもかかわらずほとんどのシャッターが閉まっている。一人歩く根津。

○市営団地・前

歩く根津。階段から降りてきた大塚と鉢合わせる。

大塚「なんや、そっちも戸上の所かいな。ウチはさっき条件だしてきたところや」

根津の顔、こわばる。

大塚「そんな怖い顔すな。大丈夫や、まだハシコはもらってない」

根津「戸上は俺が見つけたんです。俺が獲りますよ」

大塚「かわいい弟子に花持たせてあげたいとこやが、こっちもそれなりに金つこうててな。すまんが、ここは譲れんとこや」

根津「俺が獲ります」

大塚「気をつけや。入れ込み過ぎると足とられるで」

根津、階段を上っていく。

○戸上家・居間

根津と戸上が向かい合っている。

根津、契約書を戸上に見せながら

根津「契約金は合計五億。初年度に一億円、次の年から五千万ずつを四年間支払う。退団時には功労金として一億円、初年度の年棒は三千万。これはウチと戸上千との契約書だ。リーグに出す契約書には契約金一億五千万、年棒一千万と記載して提出予定だ」

戸上「……」

根津「どうだ戸上？これがウチの精いっぱいだ。ボイジャーズより上か？」

戸上「……」

根津「どうなんだ？上なのか？」

戸上、うなずく。

根津「そうか！じゃあ印鑑押してくれるか」
戸上「欲しいなら金を積みなんて生意気言つてすみませんでした。ここまでやってくれるなんて」

根津「ウチの球団でおまえが活躍する姿が見たいんだ」

戸上「ただ……」

根津「なんだ？まだ何か足りないのか？」

戸上「母を説得したいんです」

根津「そうか」

戸上「一日だけください。僕の口から母を説得してみます。もしダメだったとしても明日ハンコは押します」

根津「必ずだぞ、明日」

戸上「根津さんの球団で野球やれるの、楽しみです」

戸上と握手する根津。

○市営団地・前

軽やかに階段から降りてくる根津、携帯電話取り出して

根津「戸上の逆指名、確約とりました。明日契約書にハンコをもらう予定です。貰ったらすぐにマスコミ発表しましょう。ええ、場所は市内のホテルを借りて……。いえ、ありがとうございます。やっどぐっすり眠れそうです」

○根津のマンション・リビング（夜）

ソファで横たわり眠っている根津。

点けっぱなしのテレビからニュースが流れている。

ニュースの声「本日の東京株式市場で日経平均株価は急落、値下がり幅は三十年間で最大を記録して……」

○同

根津の携帯電話が鳴っている。

ソファで眠っている根津、目を覚まして電話をとる。

万代の声「根津、どうということだ？！」

根津「はい？」

万代の声「起きろ、起きて今すぐテレビ見ろ！」
あわててテレビをつける根津。テレビ画面、

戸上が映っている。

画面の隅に『戸上、東京ボイジャーズを逆指名』の文字。

○テレビ画面

スーツ姿の戸上の前にマスコミ各社のマイクが置かれている。

戸上「東京ボージャーズを逆指名させていた
だけことになりました、戸上俊太郎です」

一斉にフラッシュが焚かれる。

記者A「ボージャーズに決めた理由は？」

戸上「やはり、優勝を狙えるチームのもとで
やれるということが大きかったです」

焚かれるフラッシュ。

記者B「一説には川崎ストレイドッグスへの

入団が濃厚という噂もありましたが？」

戸上「いえ、そうことは全くありません。ず
っとボージャーズ一本と決めてました……」

○根津のマンション・リビング

万代の声「どういうことだ？聞いているのか、

責任はとってもらうからな」

根津、携帯電話を切る。

事態が飲み込めない根津、うつろな目で

テレビに映る戸上を見ている。

テレビ画面、切り替わって

アナウンサー「続いて昨日から続いている株
価の急落についての続報です……」

○銀座並木通り（夜）

歩いている根津。手には以前戸上が渡し
たクラブの名刺。据わった目で名刺の店
を探している。

○銀座クラブ・中（夜）

戸上を囲んで酒を飲んでいる大塚らボー
ジャーズのフロント陣たち。

大塚「それでお母さんは大丈夫なんか？」

戸上「ええ、今はもう」

大塚「驚いたで、夜中に君から電話あって。
株の暴落様様や」

戸上「母が悪いわけじゃないんです。任せて
いた人間が株の他に先物取引にも手を出し

てみたいで」

大塚「大丈夫や。負った負債はボイジャーズが全部肩代わりしたるから。なあ」

フロント陣A「その分は成績で返してもらえれば。期待してるよ」

と、戸上の肩を叩く。

戸上「もちろんです」

と笑う戸上。

ドアが開き根津、入ってくる。周囲を見回し戸上を見つけると一直線に近づいてくる。

戸上の顔、こわばって

根津「どういうことだ」

大塚「根津、落ち着け。これには」

根津「戸上に聞いてるんです。俺を騙したのか？俺はおまえに夢を託したんだ、俺の夢を」

大塚「話を聞け」

根津「答えろ！」

根津、テーブルのシャンパンやワインの瓶を払い落とす。悲鳴が上がる。

戸上「……」

根津「おまえなんてな、肘が壊れたら何の価値もないんだよ」

根津、足元の割れたシャンパンの瓶を見る。

戸上、根津を見たまま動こうとしない。

根津、割れた瓶を掴もうとするが、掴まずに立ち上がる。

と、後ろのテーブルから悲鳴が上がる。金属バットを持った河本が立っている。

河本、近づいてきたボーイをバットで追い払うと戸上に向かってくる。

河本が戸上の顔に金属バットを突きつける。

河本「なんで俺じゃないんだよ」

戸上「……才能が無いからだろ」

カッときた河本、戸上めがけてバットを振り下ろす。とっさに根津が体を投げ出して戸上をかばう。

河本の金属バットがもう一度降り下ろされる。
血に染まっっていく根津の視界。

○走る車・中（夜）（現在）

運転しながらホルダーに固定されたスマホに話している根津。その頭、白髪が目立っている。

根津「私立にこだわらなくても。優美は中学だろ」

車、赤信号で止まる。

助手席をちらりと見る。喫茶店で見たスポーツ新聞が置いてある。『戸上、引退かけて本日登板』の見出し。

根津「わかった、帰ってから話す。もう切るから」

根津、電話を切るとラジオのスイッチを入れる。

音楽、ニュース、音楽：チャンネルを切り替える。野球中継が流れる。アナウンサーが戸上について話している。チャンネルを切り替える。が、ふたたび野球中継に戻す。

アナウンサーの声「左バッターボックスにストレイドッグスの白川。ピッチャーはボイジャーズ、戸上俊太郎、四十二歳。メジャーリーグから帰ってきて三年目。今年は苦しいシーズンを過ごしています。一部では今日の投球次第では引退か、という報道も出ていますが、田沢さん、どうですか？今日の戸川の」

信号が青に変わる。ラジオのスイッチを切り、車を発車させる根津。

ふたたび赤信号で止まる車。

根津、再度ラジオをつける。

アナウンサーの声「ボール、フォアボール。

戸上、ここに来て二人連続フォアボール！

これは苦しい……」

信号、青に変わる。Uターンして走りだす根津の車。

○川崎スタジアム・外へ構内（夜）

入口へ走る根津。
入場口から構内へ入り階段を駆け上る。
階段の向こう、ナイター照明の光に照ら
されている。
歓声が徐々に大きくなる。

○同・観客席（夜）

階段の出口から出てくる根津。
懐かしむように周囲を見回す。
スコアボード、九回裏、三対二でボージ
ヤーズがリードしている。
マウンドにはまだ戸上が立っている。
三塁にランナー。
座席に腰を下ろす根津。
肩で息をしているマウンド上の戸上、フ
ォアボールでランナーを出す。
ベンチからコーチが歩いてくる。
ざわめく観客たち。

「交代、交代！」

「引退しろ、おいぼれ！」

汚いヤジが飛ぶ。

コーチ、戸上にアドバイスを言ってベン
チに戻っていく。

戸上の投げたボールがまた外れる。

スコアボードにスリーボール、ツースト
ライクの表示。

大きく息を吸うと左胸をトントンと叩く
戸上。

一瞬驚く根津。

戸上の指先から球が放たれる。

バッターが打ち返した打球が、大きく夜
空を舞う。センターが後ろに下がる。

スタンドへ入ると思われた打球、直前に
失速して扉に背中をつけたセンターのグ
ラブへ入った。

大歓声が球場を包んでいる。

周囲の人々と一緒に立ち上がり、声を上
げる根津。

○走る車・中（夜）

根津がハンドルの握っている。
窓の外、ネオンの風景が思い出のように
過ぎ去っていく。根津、左胸をトントン
と叩きアクセルを踏みこむ。夜の街を根
津の車が走っていく。

おわり

参考資料

- 『スカウト』 後藤正治（講談社）
- 『スッポンの河さん』 澤宮優（集英社）
- 『球界の野良犬』 愛甲猛（宝島社）
- 『プロ野球スカウトの眼はすべて「節穴」である』 片岡宏雄（双葉社）
- 『白球の星を追え！』 戸部良也（講談社）
- 『プロ野球ドラフトスキヤンダル事件簿』（宝島社）